

# 美人ツーリズムの成立(上)

—「加賀美人」の系譜—

## 一 課題

特定地域の女性をひとくくりに美人と表象・批評する、いわゆる「当地美人」なるイメージがある。「当地」の地理的水準は、集落から町、地方までさまざまであり、またイメージの抱き方もいろいろである<sup>①</sup>。

たとえば、数年前、奥能登地方で灘廻り（海女の行商）の調査を進めていた折、年配の男性から海士町の海女は美人だと聞いた。特定の地区を舞台にしたイメージだが、個人的な印象批評に近いものである。

地区住民が共有している場合もある。かほく市高松町長柄での聴取によれば「高松町長柄のみや（宮）の神様は美しい女神なので、長良

へ嫁にくりや皆美人になる」と伝わるという。また『高松町史』には、「若緑地区の若神様は毎年一度川で洗うことになっていたが、いちど美しく彩色しようとしたところ、神様はこれでよいといった。それ以来、若緑の女性は化粧しなくてもきれい」とみえる<sup>②</sup>。

ここで対象とするのはこのような個人や町のレベルではなく、都市・地方レベルの美人イメージについてである。京美人、博多美人、秋田美人など、盛んにWEBやマスメディアで関連情報をみることができると、本稿では金沢を主要舞台にして生まれた加賀美人・金沢美人について、その成立と展開を検証する。

このような都市レベルのイメージの成立背景については一般書籍などで、古都や城下町などの歴史的環境や、雨雪が多いなどの自然環境をとりあげたものが多くみられるが、いうまでもなく恣意的な解釈に

大 門 哲

すぎない。重要なのはご当地美人とは人々のいかなる欲望や社会意識のもとで成立し展開をみせたのかを読み解くことである。管見のかぎりかかるイメージ史的な視点からの研究がみられるのは新潟（越後）美人のみである<sup>(30)</sup>。

浅倉有子は越後美人が知られるようになるのは文化から天保期にかけてで、背景には一七世紀までは列島の境界とされる陸奥地方が美人の産地とされたのに対し一九世紀に入ると越後が境界視されるようになったこと、また経済的な発展があると説く。

小林隆幸は新潟の芸娼妓たちを美しいとする印象批評は江戸時代からみられるが、新潟美人というイメージが定着するのは明治以降で、当初は玄人女性の資質が批評の対象となつたとし、また写真がイメージの流通に大きな影響をもたらしたとする。

両氏の研究は数少ない成果として貴重であるが、ご当地美人研究を含め旧来の美人イメージ研究において欠落しているのは廓の消費との関係である。戦前期における美人は芸妓を前提とし、そして美人写真は実質、廓の宣伝媒体であつた点、美人イメージと廓の消費を連動させて把握する必要がある。そこで、まず上編で加賀美人イメージの成立と展開について検討し、あらためて下編で金沢の廓の近代について把握し、双方の関係について考察を加える。

なお、金沢芸妓が活躍した遊興地は現在「茶屋街」と通称されているが、本稿が対象とする明治から戦前期にかけては、新地・廓・遊廓という三通りの通称が一般的であつたため、現在の通称は用いず廓と

遊廓を基本的に用いる。ふたつの言葉を選ぶのは以下の歴史的経過を踏まえてである。

従来、指摘されていないが、新地・廓・遊廓の三呼称は時代により利用・使い分けに変化がみられることに留意する必要がある。新聞記事や案内誌をみると、古くは公認地の東西北三廓については、東新地という具合に、慶応三年の復興時の際に付けられた新地で呼ぶのが一般的だったが、明治三〇年頃からしだいに東廓という具合に廓が主流となる。ただし、全国的な廓案内記である大正五年の柳原煙花『諸国廓巡礼』（日本書院）や大正九年の『最新実測金澤市街地図』（橋本忠吾）に東新地・西新地とみえるように大正以降も通称として使われ続けた。

また遊廓という呼称は、明治二年の『石川県下商工便覧』に「遊廓東新地」「遊廓石坂西新地」とあり、また下つて大正年間の新聞に東西北三廓及び主計町を「各遊廓」（大正四年六月六日「北國」と記載するように、明治二〇年代から公認地をさす際にしばしば用いられるようになった。ただし、遊廓は、東遊廓というような用い方はされず、あくまで全体説明のなかで用いられる程度であつた。

大正半ばになると廓と遊廓の使い分けがされるようになる。東西両廓のうち娼妓を本位とする「下町」が消費の拡大を見せることにより、「主計町、北廓、愛宕遊廓の三廓」（大正八年一〇月一八日「北國」）などという具合に、東西両廓の「下町」をそれぞれ愛宕遊廓・石坂遊廓と通称するようになり、東西北三廓及び主計町とならびたつ

独立した区域のような印象が定着した（大正二二年五月一日「北國」、大正一三年二月二日「北陸毎日」）。この結果、金沢の廓数は、大正半ばまで東西北三廓及び主計町を合わせ「四廓」と数えるのが一般的だったが、しだいに愛宕・石坂を加えて「六廓」と数えるようになった（昭和五年九月一日「北國」）。なお、「下町」は「三番丁（町）」とも通称されたが、「三番丁」は実際の住所を厳密にさすわけではなく、色町を表わす換喩に近い。

この大正後半以降の遊廓の前景化という推移を踏まえ、廓・遊廓の記載にあたっては、芸妓を本位とする東西北三廓及び主計町については「廓」、娼妓を本位とする愛宕・石坂については「遊廓」と表記することにする。

## 二 美人写真の消費史

### (一) 写真展覧会

では本稿が対象とする加賀美人の歴史はどこまでさかのぼれるだろうか。古くは室町時代の「加賀女」（遊女・白拍子）が原型として想起される<sup>(4)</sup>。浅倉の視点を援用すれば、「加賀女」には都から見て「加賀」を「境界」領域と位置付ける意識が象られていたと読み取れる。ただし容姿美の消費を目的とする美人イメージの系譜に位置付けるのは無理があろう。

また浅倉は新潟美人の源流を藩政期にまでさかのぼらせたが、その

時代の対象化にも慎重さが必要である。確かに日本における美人消費は、古くは京都島原の遊女を批評した明暦元年（一六五五）の「桃源集」や、明和六年（一七六九）における娘評判記類の流通拡大、同時期の鈴木春信美人絵の評判ぶりから藩政期を淵源とできる<sup>(5)</sup>。

しかしこれらの媒体から具体的な娘の容姿がうかがえるわけではない。評判記は紋切調の美辞麗句で、浮世絵は瓜実顔・切れ長の目・受け口の定型描写で、それぞれ容姿を表すにとどまっている<sup>(6)</sup>。つまり藩政期までは、あくまで様式／記号化された表現を通し、美人の「評判」を共有するにとどまったと判断できる。

実質、ルックス（容姿美）を純粹に楽しむようになるのは明治以降において写真の登場を待たなければならなかった。美人消費に及ぼした写真の影響については佐久間りかの指摘が鋭い。佐久間は定まった観念的なコードを読み取る浮世絵と異なり、個別の身体的な特徴をあげきたてる写真は「美人」を「読むもの」から「見るもの」へと変化させ、美人イメージを受け取る過程自体も変えてしまったと分析する<sup>(7)</sup>。

金沢において写真を容姿の売り込みのためにいち早く活用したのは廓であった。石川県立歴史博物館（大鋸コレクション）には明治期撮影の芸妓写真が所蔵されている（写真1）。

種類は名刺判サイズ（約一〇・五×六・三センチメートル）九枚と花札サイズ（約六・三×三・七センチメートル）一八枚、ガラス乾板五枚（約二・〇×九・〇センチメートル）などである。被写体は東



写真1-1

花札サイズ写真 6.3×3.7cm 「金澤 西廊 吉野屋あだ」  
裏面：「明治二十九年暑曆」「各國煙草間屋 金澤市森下町 花錦本舗 能村次右工門」



写真1-2

名刺版サイズ写真 10.5×6.2cm 芸妓名不明  
裏面：「明治廿年 月 日寫」「石川縣金沢市殿町 寫眞士 小池兵治」



写真1-3

名刺版サイズ写真 10.3×6.2cm 芸妓名不明

裏面：「吉田好二 石川県金澤公園地」、「天下第一ノ美人呼ンデ傾城ト号ス」（墨書）。



写真1-4 ガラス乾板 12.0×9.0cm 芸妓名不明

京・大阪の芸妓も含まれるようだが、裏面に金沢の写真技師の吉田好二・小池兵治の名がみえるのは、金沢の芸妓と判断できるだろう。

撮影年代は、手札写真の一部に「明治廿一年」の印刷、また「明治二七年」の墨書きがあり、多くは明治二〇年代と判断できる。ただし、吉田撮影の写真は一部、明治一〇年代にさかのぼる可能性がある。

その根拠となるのが写真裏面に印刷された住所である<sup>(8)</sup>。吉田写真住所から「観音町」版と「金沢公園内」版の二種類に分類できる。観音町での開業時期は、明治一一年一〇月二四日付「石川新聞」に「吉田好二が観音町の寫眞場ハ御巡幸の頃方して營む業の繁昌し」云々とみえることから明治一一年一〇月頃と認められ、また、明治一一年『石川県下商工便覧』に御徒町店が紹介されており、明治二〇年頃に御徒町へ移転したと推測できる。これから「観音町」版は明治一〇年代撮影の可能性が高い。かたや「金沢公園内」版の撮影時期については、公園内の営業時期をうかがえる関連資料を確認できておらず推測の域を出ないが、御徒町時代に出張所があったのかもしれない。注目されるのは吉田の営業地の観音町・御徒町はいずれも東廓付近に位置していることである。廓附近に写真店を構える例は金沢の写真屋の元祖とされる高山一定でもみとれる。「市内寫眞屋の元祖 高山一之の事」によれば、高山は明治四年に上堤町の飾り職人の家の二階で写真業を始め、まもなくして西廓の入り口に移り、雲月楼という料理屋を営みながら、神明坂下に写真場を置いたという（大正一二年

一二月二〇日「北陸毎日」）。高山の営業状況をみると、廓は写真館の最大の得意先であったどころか、双方は半ば提携関係にあったように思える。

撮影の時期は正月だろうか。小池兵治の写真館の回顧録によれば、正月や節分に東廓の芸妓が大挙して撮影に訪れたという<sup>(9)</sup>。芸妓たちは新規顧客の取り込みや馴染み客の繋ぎ止めのためなどの手練手管に、華やかな正月の晴れ姿写真を活用した可能性がある。

顧客との特定の関係を超えて大衆がひろく容姿美／芸妓写真を消費する全国的なきっかけとなるのは、東京の人気芸妓の写真を一堂に集めた明治二四年の浅草・凌雲閣における百美人展覧会とされる<sup>(10)</sup>。

この展覧会が生まれた経過について佐久間りかは美人写真は浮世絵のような紋切型のコードをもたないことから、統一的な美人イメージを創出するために収集が必要となり活発化したと指摘する。卓見であろう<sup>(11)</sup>。

金沢では浅草の展覧会から三年後、明治二七年六月に同様の写真展が開催される。「金澤市中の百美人」を投票で募り「見世物」にしようとしたもので、開催目的は共進会の「金儲け」にあった（明治二七年六月二二日「北國」）。

その後の経過をうかがえる資料がみあたらず開催の詳しい状況は不明であるが、実施されていたとすれば、どのような女性が応募したのだろうか。当時、一般の女性が自らの容姿を衆目にさらす機会はなく、またさらすことは非道徳的とされた時代であった点、「金澤市中」

といっても芸妓が前提となったと想定できる。ただし、そうとは断定できない事例が同時期に他県で見出せることを注記しておく。

福岡県では明治二十七年に大神常吉が東中洲の共進館で美人共進会を開催しようと県下を駆けまわり士農工商の別なく二万五〇〇〇余人の女性を調べ、四〇〇人を選出した。紹介方法は以下のように前例がないものだった。

「集産場の如き店を開き右の美人をして出品を賣らしめ入場者に自由の観覧を與ふる方法なり。又會場外には一棟の監督室を建設し此所に堅固なる下女を附け置、親子兄弟なりとも男子は一切入れず又他人の出入を禁じ會場の出入口には巡查を配置して警戒せしむることになし」(四月五日「北國」)。販売員として働く様子を見てもらったのである。一般女性を美人として消費する欲望がすでに明治二〇年代には高まっていたことを認められる。

なお、同年五月には写真師吉田好二が、一三歳当時に撮影した東廓の海老屋咲の写真を長さ五尺幅三尺の大額にひきのばして富山博覧会へ出品している(明治二十七年五月二十九日「北陸」)。下編で報告するとおり、咲は東廓の芸能発展に尽くした明治後期を代表する名妓であるが、すでに「赤襟」(半玉)時代にその評判が吉田の耳に届くほどの存在だったと想像できる。

博覧会へ芸妓写真が出品されたのは、もともとさまざまな人物の肖像画が展示されていた経緯があり、そのなかには芸妓の絵も相当あったからでなかるうか。たとえば、日本初の西洋裸体画展示で論争を呼

んだ明治二八年の第四回内国勸業博覧会には、東廓の竹米小梅の肖像画が出品されている。新聞は肖像画について「金沢美人の肖像美術品」と説明しており、管見のかぎり、これが「金沢美人」という言葉が確認できる最初の記事である(明治二八年四月一日「北國」)。

明治三〇年代に入っても百美人展示の人氣は続いた。明治三十三年七月の夕涼みシーズンには「山三」の発起で「金澤藝妓百美人展覧會」が催された。「山三」とは材木町の山本三右衛門の略称で、維新期に一時花開いた卯辰山芝居の興行主も務めた金沢の興行界の重鎮である(大正七年六月二十五日「北陸」)。

展示の概要は以下のとおり。「金澤東西北三廓藝妓中より百名の美人を撰抜し、之れをブルマイト引延しの寫眞に調整し、一方犀川口にては野町泉野神社境内に、一方浅野川口にては橋場町ト一亭脇樓上に陳列上を設け、入場者をして投票有権者となし、二ヶ月間の豫定を以て汎く投票を募集する筈なるが、其高点者には賞品を贈り百美人の肖像は來る三十五年大阪に於て解説せらるべき内国勸業博覧会へ出品陳列する計畫なりといふ。因に右ブルマイトは目下當地寫眞師小池方に調整中なり」(明治三十三年七月五日「北國」)。

境内地を展示会場にした点、いまだ見世物の延長という意識があったとわかるが、実際の展示会場は、境内ではなく「元勸工場跡の階上」(明治三十三年七月二日「北國」)だったようである。

はたして当時の人々は芸妓の写真をどのような思いで見つめたのだろうか。柳田國男は昭和九年「田植えの話」で女の標準は美醜よりも

仕事と考えられたと指摘したが<sup>(12)</sup>、それは農村に限ったことではなからう。日々の労働に明け暮れ、美装に時間・金を費やす余裕などなかった当時、芸妓とは圧倒的な美をほこる存在であったと想像できる。

芸妓の美に対する大衆の感覚を物語るのが明治二十七年の投稿記事である(二月一日「北國」)。話の舞台は金沢郊外の西念の温泉場。投稿者はそこでひととき目立つ「美形」の女性を見つける。女性の年は一九、二〇歳くらい。笑うとえくぼができ、「中へ家も人も捲込んで仕舞ひさう」な魅力をもった。身なりも豪華で、どうみても「豪富の令嬢か若奥様」。あとで聞くと、「北の新地」の芸妓で、同樓の女中と顧客の男をお供に入浴に来ていたとわかったというものである。一般女性とは一線を画す存在感を大衆は感じ取っていたのである。

とうぜん廊に行けない庶民は芸妓を無償で目にできる機会があるとわかれば、意気込んで出掛けた。たとえば、明治二〇年の記事には西廊の楼主一同が大乗寺山で凧上げ遊びをするために芸妓を連れ出したところ、「藝妓の後を慕ひ數百の鼻下長連をも見受け」たとある(明治二〇年三月二三日「中越」)。秋の遊山も格好の見物機会となった。明治二九年の記事には卯辰山へ出掛けた東廊芸妓の「見物旁出掛くる鼻下長連」も少なくなかったとみえる(明治二九年一〇月一九日「北國」)。

また楼主の葬儀の様子を伝える記事には「野邊送りをなしたるより欲張ツた色男連は一時間幾何々と云ふ高直い美人を今日は口ハで見

らると其行列を遙々の處より慕ひ來りしものありたり」とあり、芸妓見物目的で楼主の野邊送りに出掛ける連中がいたことがわかる(明治二十七年一月二三日「北國」)。

芸妓がそろって最前役者の芝居見物に出かける総見も芸妓を間近に見られる機会となった。たとえば明治二八年に「明日は東廊、明後日は母衣町の美形が何れも總繰り出しにて見物に行く」と云へば、此の二日は舞臺を見るより見物場を見る方がよからう(明治二八年九月九日「北國」)とあるように、新聞は大衆の期待を受けて総見の予定まで伝えた。

結果、以下の通り、劇場は芝居ではなく芸妓見物目当ての客が押し寄せることとなった。「二十日は東廊藝妓の惣見物とて場内宛ら綺羅星の如く時ならぬ花を咲せて色香を競ひけるが、又た之れを見んとて我先きにと駆付けたる看客非常に夥しくて大人」(明治二八年九月二四日「北國」)。地味な衣類をまとう観客のあいだで芸妓の姿は光り輝いて見えたというわけである。

また休みのそぞろ歩き姿も見物対象となった。明治二十七年に金沢公園を会場に催された官民共同大捷祝賀会の際は、東西北三廊及び主計町・犀川河原の芸妓は祝賀の雰囲気を楽しむために一丁羅の帯着物を思い思いに着飾り街中に繰り出した。新聞は、麝香の香りを放ちながら街中を歩く様子を「花爛漫、嬋妍とも窈窕とも實に比へん」と、言葉で表現できないほど美しかったと伝える(明治二十七年一月二日「北國」)。

林葉子は、芸妓は一時期、美を通し「絶大な力」をもったと指摘したが<sup>(13)</sup>、その指摘を敷衍すれば、一連の記事は、芸妓の美は、庶民があこがれても、決して保有できない力であったことを示そう。とすれば美人写真展示の会場の雰囲気も察しがつく。その開催目的を主催者が「見世物」と語ったように、展覧会は庶民には縁遠い「美」を感受できる、さらには廓という異世界をのぞきみることができ、またとない機会として受容されたと思像できる。それは神仏のご開帳に通じる視覚体験でなかったろうか。

しだいに写真技術の発展により写真自体が珍しくなくなることもあり、大正に入ると美人写真展の開催を確認できなくなる。しかし、戦前期まで庶民相手に細々と各地で催されていたのだろう。昭和十一年には、金沢市の英町商工会が納涼売り出しにあわせ、「金澤美人写真五人明し」と銘打ち、各店頭に主計町の芸妓の写真を掲げた（昭和十一年八月五日「北國」）。

## (二) 絵葉書と写真集

### ① 絵葉書

明治二〇年代、美人／芸妓写真は展覧会という場で消費されたが、明治三〇年頃になると、写真を個人的に消費できるようになる。当初は商品ではなく景品として入手できた。

明治二十九年、東京日本橋の清水開花堂は、「美人石鹸」の消費を促すため、芸妓の写真をおまけとしてはさみこむサービスを開始した。

全国各地に頒布された写真は一万種。被写体は販売する地域におうじて地元芸妓から選ばれた。

金沢からは東・西両廓の芸妓が数一〇人採用された（明治二十九年四月二十六日「北國」）。この戦略が評判を呼んだのか、翌三〇年には別会社「鷹錨印写真付葡萄酒」を売りだし、「全国到る處の有名なる美人の寫真」を商品にはさみこむサービスを行った（明治三〇年七月九日「北陸」）。写真の具体的な規格は不明だが、花札サイズのようなものだったのだろう（図）。

明治三〇年代にはいると全国的に芸妓写真が商品として流通するようになる。たとえば、明治三二年一〇月一日付「北國新聞」には大阪の敬業社が「新奇絶妙 活動美人珍寫真」を三〇枚セットで甲六〇銭、乙三六銭で発売するという広告が載っており、大坂の芸妓写真が出回るようになったと思像できる。ちなみに商品名にみえる「珍写真」とはなにか。広告の惹句には「活人間の如く」「自ら舞ひ自ら踊る光線學上不思議の發明」とある。レンチキュラーのような仕組みだったのだろうか。

実際に大衆レベルにまで芸妓写真が出回るのは、明治三十三年に私製葉書が認可され全国的に絵葉書が人気を集めるようになってからだろう。石川県では明治三八年頃に大流行を迎え、美術絵葉書・美人絵葉書、風景絵葉書、ポンチ絵葉書などさまざまな種類が出回り（明治三八年九月二五日「北國」）、宇都宮書店が発起人となり絵葉書交換会も組織された（明治三八年一月一六日「北國」）。



(一八三二)には集雅堂から「廓のにぎはひ西廓之部」が発刊<sup>16)</sup>。同年、藩により廓は閉鎖されたため、以降しばらく案内誌はみえないが、慶応三年(一八六七)の営業再公許後は、『菊くらべ(新両地案内)』(金沢市立玉川図書館蔵)が刊行される。

刊行ラッシュを迎えるのは明治二〇年代。同二〇年、吐香情史が序文をつづった「金澤芸妓見立」(明治一九年鶴見兵太郎『金澤芸妓風俗』か)を東廓の人氣芸妓・江戸屋鉄が出版する(明治二〇年七月一日「中越」)。その後、二四年『金城三廓花の見立』(金沢市立玉川図書館蔵)、同年『三遊廓色員録花つくし』(西尾市岩瀬文庫蔵)、二五年『ひたちおび』(石川県立歴史博物館蔵)、三九年『廓案内』(玉川図書館蔵)が、また番付としては明治二五年『東新地藝娼勉強クラへ身立鏡』(個人蔵)が出版される。これらの出版状況をみると、廓の消費は明治二〇年代に急速に拡大したと想定できる。なお『三遊廓色員録花つくし』は二四年一〇月に風俗壊乱の影響があるため内務省より発売頒布禁止指示が出ている(明治二四年一〇月一日「自由の警鐘」)。

ユニークなのは『ひたちおび』で、金沢の「東新地・西新地・北新地・犀川・浅野川」、「七尾常盤町」、「富山桜町」、「福井塩町・魚町」の芸妓計八三人のほか、に地役者一六人の名が列挙されている。当時の人びとは視覚文化にかかわる人氣者として芸妓と役者を同じ位相に位置付けていたことが読み取れよう。

これらの案内記は文字での紹介にとどまり芸妓たちの容姿は不明だった点、既述の西廓の美人写真集は画期的な案内誌として消費され

たと想像でき、また当時は西廓が東廓に先んじて積極的な広報を展開していたと判断される。

西廓がこのような写真帳を刊行した背景は二つ考えられる。一つは明治三五年に東京・吉原で、集客減少対策として案内誌「吉原細見」に写真を掲載する工夫が初めて行われた影響がある<sup>16)</sup>。

二つ目に明治三十一年に鉄道が敷設され、廓とは馴染みのなかった加賀南部や金沢近郊の豪農、県外から旅行者の利用を期待できるようになったことをあげられる。金沢の芸妓に関する事前情報をまったくもたない遠方の客にとって写真集は芸妓を見定められる唯一の媒体となったのだろう。

同時期には、芸妓は写真帳だけでなく金沢の観光ガイドブックでも写真紹介されるようになる。明治三六年、金沢実業界が杉本利平次編『金沢とその周辺/Kanazawa and its environs』を刊行する。想定した石川県初のガイドブックであった。芸妓は「Beauties in Kanazawa」のタイトルで計一七ページにわたり、東二三人(内ターボ三人)、西二七人(内ターボ二)、北八人が紹介された(写真2)。明治三八年には右書の表紙と表題をさしかえた西村弥三郎『金澤みやげ』(北陸戦報社)が刊行される。

金沢の名所や有名人を紹介した明治四三年『金沢景物大観』(北陸出版協会)は、「金城の名花」というタイトルのもと、東一八人・西二六人・北二二人・主計町九人・愛宕一五人計八二人の芸妓を四べ



写真2 『金沢とその周辺/Kanazawa and its environs』 明治36年  
上段見出しは「Beauties in Kanazawa」。



写真3 芸妓写真アルバム 縦13.0 横18.5 厚4.0cm 石川県立歴史博物館蔵

ジで紹介した。愛宕とは冒頭にしめしたように娼妓を本位とする遊廓を指す可能性があるが、写真は娼妓なのか芸妓なのか職域は不明である。

これら観光案内誌の写真ページのタイトル「Beauties in Kanazawa」「金城の名花」はあきらかに金沢美人・加賀美人へとつながっていく表現である。つまり、「金沢美人」イメージは、明治三〇年代半ば、観光案内誌の刊行をもってその成立が促されたといえる。

これら観光案内で美人が紹介された時期は絵葉書が大ブームを迎えた時期である。案内誌に掲載された写真は絵葉書や生写真としても販売された可能性がある。それを示唆するのが石川県立歴史博物館所蔵の芸妓写真アルバムである(写真3)。折本に最大一四・〇×一〇・〇センチメートル、最小四・〇×六・〇センチメートルの生写真が計三一枚貼付されている。

その画像は明治三六年刊行の『金沢とその周辺』と一部合致しており、撮影年代は明治三六年頃と断定できる。注目されるのはその内訳で、西廓二五枚、東廓四枚、主計町一枚、小松一枚であり、ほとんどが西廓でしめられる。もしかしたら、明治三七年刊行の『金澤市西廓百美人寫真帳』掲載写真と重複するものがあるかもしれない。

### (三) 新聞連載される芸妓

絵葉書や写真帳などを見てきたが、芸妓の容姿鑑賞をより身近にし

た媒体として看過できないのが新聞である。従来の美人イメージ史研究でも等閑視されてきた資料群である。

新聞紙上では明治二、三〇年代にかけて毎日のように芸妓の近況やゴシップが報じられていた<sup>17)</sup>。とりわけ情報を中心となったのが色恋である。新聞社には金沢にとどまらず大聖寺・小松・松任・金石・津幡・七尾・輪島など県内各地から芸妓にかかわる艷種が寄せられ、紙面の少なからぬスペースがそれで埋められた。

明治四〇年代に入ると、芸妓にかかわる記事は従来のゴシップ記事に加えて、芸妓一人ひとりを写真入りで紹介する記事が増加していく(写真4)。つまり、マスメディア自体が廓案内誌の役目をもつようになっていくのである。



写真4

明治44年9月27日「北陸新聞」  
「浅野屋音重」は名妓とされた浅野屋音羽の娘で、自身も名妓と称えられた。

そのさきがけは「北陸新聞」で、明治四一年四月二五日より夏にかけ「花柳月旦」と題し、県内各地の芸妓を紹介した。八月分が欠落しているため総人数は判断できないが、七月末で七六人を数えた。第一回目は西廓の平田屋茂で、「何となく愁いを帯た所は、海棠の雨に悩むにさも似たりで、何處やら可愛い氣のする妓だ」云々と容姿美やたずまいについてコメントしている（四月二五日「北陸」）。また別の芸妓については「縹緞は二の町だが、義太夫父子は至つて上手、よい喉を器用に振り回し」云々と芸能者としての能力を高く評価している（七月三一日「北陸」）。

明治四三年一月からは一年間をかけて「花くらべ」と題し北陸各地の芸妓二四二人を写真入りで紹介する長期連載が行なわれた（明治四三年一月二二日～二月二四日「北國」）。また同年一月には「北國新聞」が「寫真判断」というタイトルで顔写真を掲載し、人相骨相占いの連載を実施。掲載された人物三三人のうち軍部や政財界の有名男性が九人、ほかはすべて芸妓でしめられた。ちなみに第一回は東廓の越濱女将だった（十一月一日～十一月二三日「北國」）。

明治四四年一月には「北國新聞」が金沢の東西北三廓及び主計町の芸妓計四六人を写真入りで紹介する「色ごろも」の連載を開始（明治四四年一月三日～二月二四日「北國」）。同年八月からは「北陸新聞」が見出しなしで石川・福井の芸妓八四人を写真・プロフィール入りで紹介する（四四年八月一日～十一月二九日「北陸」）。プロフィールの内容を参考までにあけておこう。「殿初初榮（西廓）

／徳川時代の美人に酷似して居るとて若い道樂の畫工連に騒がれて居る。顔の輪廓の圓いのも同じく性質もまた圓く出来て居て、曾て朋輩衆から怨みを受けたことがないと云ふ」（明治四四年二月一七日「北國」）。「徳川美人」に似ているという評価に明治ならではの時代性を見て取れる。

このような連載は大正以降も続く。たとえば大正三年には北國新聞は東西北三廓及び主計町のほか小松・松任・七尾・山中・山代の芸妓の全身写真を紹介する連載を開始。タイトルは季節ごとにかわり、一月中旬までは「初すがた」で襟直ししたばかりの芸妓を紹介。同月後半以降は「春すがた」、四月三〇日以降は「百姿百態」と題し人気芸妓を紹介。紹介人数は計九三人。ほかタイトルはつかないが洋装した芸妓らしき女性の写真が連載途中に掲載されている（大正三年六月二七日「北國」）。

大正五年には芸妓の幼少・赤襟時代と白襟時代の写真を並べその個性や成長ふりを紹介するユニークな連載「今昔姿くらべ」で計四四人を紹介（大正五年六月六日～九月二二日「北國」）。たとえば、主計町の藤の家ぼんたについて「藝妓の投票に第一の高點を占めて突出し早々全盛の名を唄はれたのは西廓に居つた時のこと、其後主計町の野村屋へ轉じ更に姉と共に一旗擧たのが藤の家ぼんた。呉座谷の樓主が仕込んだだけに踊は主計町でも鈴子ぼんた（森龜）、初枝と四人組に数へらるる達者さ殊に近來は大鼓に丹精を凝して指頭に血汐の花を咲かすこともある（後略）」と、その芸の精進ふりを紹介している（六

月二八日「北國」。昭和に入っても芸妓の紹介は定番記事であり、たとえば昭和一年の春には「艶色春姿」と題し、計一〇人を紹介している（三月一三日～五月一日「北國」）

#### （四）『城下の百姿』の出版

絵葉書、写真集の出版、新聞連載から明治後期以降、美人／芸妓にかかわる写真が急速に消費拡大をみせたことを見て取れるが、大正期に入ると、かつてない写真集『城下の百姿』が刊行される。

明治三〇年代に出版された『金沢とその周辺／Kanazawa and its environs』などは一ページに複数の芸妓写真をならべる紙面構成だったが、『城下の百姿』は市内四廓の芸妓を一頁に一人あて上下二巻にわたって掲載する豪華版だった。

上巻の発行は大正三年一月二七日。値段は一円五〇銭。背表紙には「金澤藝妓の粹」、表表紙は「城下の百姿上巻」とある。「発行並編輯」は「幸正重太郎」。その緒言には、当初、一〇〇人を一冊にまとめる予定だったが、締め切りまでに写真が準備できず、また新年撮影の写真を使いたかったため、上巻にいったん五〇人だけを載せ、あらためて下巻に一、二流の芸妓を掲げることにしたとある。掲載された芸妓数は、西一九人、東一二人、北一二人、主計町八人の計五一人で、全身像を撮影構図とする。

下巻の発行は同年六月一〇日。背表紙に「城下の百姿（下巻）改題 百美人花揃ひ 六月號」、表表紙に「金澤百美人花揃ひ」とある。下

巻本という位置づけだが、上巻掲載の写真も再録しており、実質、上巻の大幅な増補改訂版といえる。掲載人数は西四六人、東三一人、主計町一二人、北一三人、金石二人、七尾・松任・小松・飯田・大聖寺各一人の計一〇九人。

下巻は上巻と異なり、写真のあとに芸妓一人ひとりの特徴や経歴をかなり詳しく紹介している。一例を紹介しよう。「野村屋愛子 愛子は野村屋の養女で新八田屋女将などと兄弟である。此妓は金沢代表的美人とまで唄はれ、曾て三越呉服店のモデルや花屋敷の菊人形などに紹介されてゐた有数の藝者である。至つて温順な表情に富むだ人氣もので一時全盛を極めたが好きな酒が過ぎてか病氣を起し金澤病院に入院して漸と此間退院したばツかりだったが、又々薬瓶と親しんで居る、此妓は幼少より多くの師匠に就て踊、太鼓、三味、生花、端唄、長唄を習つてあらゆる席へ現はれて嬌名を轟かしたものである」

大正三年の金沢の芸妓総数は五三八名で、写真集に紹介された数はその五分の一以下の一〇二名である。野村屋愛子の紹介文からわかるように、被写体となったのは、容貌だけでなく芸も優れた一流芸妓だったと想像できる。

なお、同書下巻の巻末には朱印を押した金沢十美人投票用紙四枚が挟まれており、写真集のなかから一〇名を投票し、当選した芸妓をコピータイプにして写し出し、さらに若手新花や県下各郡の美人を加え画像を刊行する予定とみえるが、その後の刊行実績は確認できない。

大正期の美人写真の特徴としてこのような豪華本のほかに芸妓の水

着絵葉書をあげられる。大正二年、芸妓の海水浴姿二人の写真絵葉書が販売され、風俗を害するものとして警察に取り押さえられた（大正二年七月二七日「北國」）。しかし、取り締まりの効果はなく、大正七年頃には水着写真がブームとなっていく。

同年の記事には「近時一般青年間に海水浴場に於ける婦人裸体其他性慾を唆る如き繪葉書を取り遣りするもの多く、殊に夏季七八月頃は毎年此種の葉書を差出すものあり」（大正七年七月二二日「北陸」）とみえる。芸妓写真は顧客が容姿をめであるという水準を

越えて、性的な欲望を直接むける媒体として流通するようになったといえる。

大正期は金沢美人という言葉に関して注目すべき年となる<sup>18)</sup>。明治四五年四月には金沢花屋敷なる躰躑・菊人形の興行小屋で、「金澤美人人形」と題し、東廓・山田君子、西廓・月見薫、北廓・島田錦太、主計町・野村屋愛子の「似顔人形」、つまり生人形が飾



写真5 金澤花屋敷絵葉書「金澤芸妓濱遊び」個人蔵

られた。人形は同年秋、大正元年一〇月にも登場。このときは兼六公園の霞ヶ池池畔を背景に人形を飾った。さらに翌一〇年には新作「金澤芸妓濱遊び」が飾られ（写真5）、新聞は「金澤の美人と東京の美人の何つちが美しいか」比べてみようと同心を誘った（大正二年一〇月一七日「北陸」）。

写真商品にも金沢美人が多用されるようになる。前掲の豪華写真集の新聞広告には「金澤美人花揃ひ」と見出しが躍る（大正三年六月八日「北國」）。大正五年には「金澤美人」と題した葉書写真が発売される。被写体については発売予告記事に「市内東廓と主計町での若手藝妓の葉書が去年あたりから流行して来た。西廓と北廓とは追々撮して貰うことになるだらう」とあり、まず東廓・主計町の芸妓三、四〇人が選ばれたとわかる（大正五年三月二九日「北國」）。これらの動向から、金沢美人という言葉は大正初期以降に定着したと判断できる。

### 三 美人言説の歴史

#### （一）美人零落論の時代

ここまで写真を素材とし大正期までの美人イメージの展開を追ってきたが、写真消費の拡大とあわせて注目したいのが一定の土地の女性を一からげに美人と批評する言説である。その源流として注目したいのは明治半ばより増加する金沢の女性全般を対象とする批評記事である。

地元新聞を通覧すると、「北國新聞」が、明治二六年に「金澤の女子」（九月一三日）・「名古屋女と金沢女」（二月一三日）、明治三三年に「女」（九月二九日）、明治三五年に「金沢の女界風俗」（十一月一日）、明治四二年に「金澤女」（九月三、五日／二回連載）・「金澤の女」（二月一日～四日／三回連載）、明治四三年に「金澤の女風俗」（二月一八日）を、また「北陸新聞」は明治四三年に「北陸の美人」（二月二〇日～二五日／六回連載）、明治四四年に「時代美人」（二月一六・一八・一九日／三回連載）、大正二年に「北陸の女」（一〇月七日～二月二日／四〇回連載）などを掲載している。

批評の内容は三種類にわかれる。第一が良妻賢母規範にもとづく批評である。明治三三年「女」は「金澤に出戻りの婦人が多いとサ。或る外來人がいった。十九の花嫁さんは今度で三度び目だといふのが幾らでもある。女の方でも離縁をなんとも思はず、男の方でも矢鱈に妻を取替へて」云々、あるいは金沢には「女の破戸漢が多い」などと、夫婦関係が不安定であり、その要因は女性の気質によると指摘する。また明治三五年の「金澤の女界風俗」は、男子の望みから関東の婦人は凜乎として気高くあろうとするが、一方、金沢の娘たちは妖艶・優美を男子がもとめることから上から下まで赤色を好むと、品のなさを批判する。

明治四二年の「金澤女」は金石往還で車力をしたり、頭に桶をのせ売り歩いたり、また芸娼妓が随分多いと印象を語り、女は家で起居し、家で働けるよう家庭工業の発展を期すべきだと説き、また石川県

が元大藩でありなら、貧乏になったのは妻女の経済思想の影響によると、女性の労働形態や経済能力を批判する。

第二は装いの流行の遅れを指摘するもので、明治四三年「金澤の女風俗」は、女の風俗は上方から江戸風が変わったが、髪型・背負揚の見せ方・着物の色彩が東京にくらべ遅れていると指摘する。

第三が美人を主題とするものである。その趣旨は二段階に変化している。第一段階は美人零落論ともいうべき内容である。たとえば、明治二六年の「金澤の女子」は「関東は美女を出す處にあらず、美女を出す處は京都を第一とし、越後、名古屋之れに次ぐと稱す、然れども京女は細きに失し、越婦は太きに過ぎ、名古屋の婦女に至りては風韻雅致を欠く、唯だ其の細からず太からず、嬌婉優美にして雅致風韻を有するものは金澤の女子歟、金澤の女子が生れ得て天福に富める、洵に羨むべきかな。殊に女子教育の上より見るに、三府四十餘縣の多き、金澤の女子の如く善く教育せられたるものは稀れなり」と金沢の女性は才色兼備であり京都・越後・名古屋を上回ると絶賛する。

とはいえ、個々の人生をみると、「東京の遊廓に於て其娼妓の府縣別中、高點を占むるものは何縣ぞ、誰れか其石川縣たるを知らざらん。而して其石川縣中の九分強は金澤女子なるからは、金澤の不面目此上もなく、其苦界に沈淪せる金澤女子の不幸憫然に堪へず」と苦界に身を落とす者が多いと嘆く。

同年の「名古屋女と金沢女」も、右掲記事と同じく、美人の不幸を嘆く内容で「日本全國中婦人の産物を以て有名なる處を名古屋とな

す」と始まる。内容は藩主徳川宗春が京都の島原を模して廓を設け樂しんだことから、名古屋の人々がひろく遊蕩を好むようになり、内妾外嬖盛んにおこなわれ、結果、倫理道德の廢頽滅却が甚だしいと批判した上で、明治以降、金沢の士族の女性が東京など各地に浮かれ女として売られている状況に触れ、「金沢の士風人心遂にいかなる魔界に運ばるべきか」と糾弾する。

ちなみにこのような美人薄幸觀を土台とする批評は、明治三〇年代以降、見かけなくなるが、世間話的な記事では生き続けた。たとえば、明治四四年の記事「薄命の美人」は父を亡くし独り身となった金沢市内の娘シヨウの人生を紹介する。金沢・福井・岐阜と各地で悪徳口入屋に娼妓となるよう強引に契約され、貸座敷から逃げ出すという生活を繰り返して、最終的に岐阜の料亭の住み込み酌婦に落ち着くというものである（明治四四年二月七日「北國」）。

## （二）混合民族論からご当地比較へ

明治二〇年代の美人言説は写真と同じく芸妓を批評の前提としていたが、明治三〇年代にはいると、芸妓という前提を超えて地域の女性一般を対象とするようになる。対象をひろげる回路となったのが日本人の系譜を多民族・多人種と想定する混合民族論である<sup>19)</sup>。

明治三〇年ころには美人と混合民族論を関連させた視点がひろがっていったことは金沢医学会通常会で行われた止善堂病院長・山田博士の「美人論」講演会からうかがえる。内容は、日本は元来のコロボツ

クル人種が全滅して、風力と海潮によって漂着した天降人種とアイヌ人と蒙古人種が混合した状況にあるため身体的特徴はさまざまであるとした上で美人の平均的特徴を説こうとしたものである（明治三〇年六月一五日「北國」）。

具体的に地域名をあげた言説が登場するのは以下の明治三四年の記事からである。「飛騨高山の婦人は肌膚細膩にして容姿美なり。能美郡白峯村の婦人亦眉目好し。白峯には平家の落人ありしによると傳ふ。果して然らば高山の民族は何人の血統にや」（明治三四年三月二日「北國」）。

柳田國男の山人論とも通底する視点を見出すことができよう。つまり、混合民族論にもとづく視線を基本としつつも、かつ都市の発展や鉄道路の拡大への反動から、それらの影響が及ばぬ山の民に歴史的なロマンチズムを感じ、地元女性を美化するようになったのである。

ちなみに白峰村や高山を美人の産地とする視線はその後も衰えることなくむしろ強化されていく。明治四一年には「美人村」という見出しで、白峰村桑島の女性について「美人系と聞こえた北國の美人を代表する」とし、どの女性も「第一髪の毛は漆のやうに真ッ黒で色は雪のやうにクツキリと白い」と報じた。

注意したいのは素人の女性を美人としてイメージするものの、芸妓を美人の前提とする通念が深い影響をもたらしていたことである。「美人村」桑島の女性の特性についてこう記す。

「女は大概遊藝を知らぬ者はない。甚麼女を掴まへても一寸した手

踊りや三味線を知らぬ者はない。是れは畢竟村の若者等が遊び場がない所から自然の勢ひで遊藝熱が高まつたのだといふ」（明治四一年六月二一日「北國」）。廓とは疎遠な地域にあるため、地区の女性が芸妓の役割をもつたと紹介しているのである。つまり、芸妓の代替的存在として山の女性を価値づけることで美人とイメージしたわけである。

明治四〇年代になると、混合民族論にもとづく視点を保有しつつ、国内各地の美人を比較する言説が増加する。この言説パターンで注目されるのが、タイトルや説明に頻出する「美人系」という言葉である。当該語彙は現在死語となったが、国会図書館デジタルライブラリーで検索すると明治三九年刊・栗島狭衣『日本美人史』（尚友館）をさがげにし、昭和二七年まで確認できる。ちなみにその適応範囲は日本にとどまらず、昭和二年の記事には「南米の美人系なるポリビア出身の艶にあでやかな令夫人」（昭和二年七月二〇日「神戸又新日報」とみえ、世界各地に及んだ。

その言葉を定義付けした記述は確認できず意味を明示できないが、初期資料の『日本美人史』の場合、「わが三千年の歴史を貫いて今に傳へられた美人系」とあり、前後の文脈から歴史や風土との関係性の中で美人をまなざす意図をかたどった言葉だとわかる。

「美人系」は当時の流行語に近かったのだろう。人気作家の徳田秋聲もその言葉／視点に魅了され、明治四一年「趣味」に「美人と美人系」を発表している<sup>(20)</sup>。内容は東京式女と上方女を対比させながら、

ら、容姿や性格、着物などについて女性美の特徴を説いた随筆で、最後に「金澤美人」について「色が白く、皮膚が細か」など評価している。美人の対象となる女性は芸妓にとどまらず、「女学生」への言及がみられており、美人系は従来の芸妓を前提とした「美人」とは異なる斬新な視点をかたどった言葉として歓迎されていたと想像できる。

ただし、徳田秋聲のように東京と上方を対比させ最後に金沢を言及するような叙述構成は異例である。石川県の新聞などで見る限り、同時期の叙述パターンは、列島を日本海側と太平洋側にかけて、人種・民族という視点から美を批評する点に見出せる。たとえば、明治三八年四月二六日付の批評記事「美人系」の説明の一部を抜き出そう。

「我日本に於ても越後や京都、名古屋の如きは美人系と稱せらるる處にして這は獨り此地方の女子が藝娼妓に出稼ぎする故のみならず實際に多くの美人を出すこと非定すべからざる。（中略）其地理學的分布の跡を察するに太平洋岸は名古屋以北以東の地青森に至る迄が醜人系、否な非美人系統に屬し、日本海岸は一般に美人系に屬するものに似たり。而して斯くのごとき現象を造りたる所以は関東系は人種の雜駁にして且つ新らしきに依り日本海岸系の美は人種の古きと純粹に近きによる結果ならんと説く人あり如何のものにや」（明治三八年四月二六日「北國」）。

現在もWEB上に流通する日本海側に美人が多いという言説の原点をここに見出すことができる。日本海側を美人系、太平洋側を非美人系とする根拠は、右掲記事では、人種が日本海側は純粹・古体、太平

洋側は雑駁・新体であると指摘するが、これと真逆の言説もある。明治四四年の記事「時代美人」は、日本海側に美人が多いのは人種の混交の結果と説く。つまり、古代における日本海交流の影響から朝鮮人が漂流してきた土地に美人系統が多いという（明治四四年一月二日「北陸」）。

このような日本海側美人論が浮上した背景はなにか。日露戦争後、異質の価値をもって表日本と対峙しようとする裏日本イデオロギーが沸騰したことを大前提としてあげられるが<sup>(2)</sup>、太平洋側ではなく日本海側が美人の産地となったのは三つの理由を想定できる。

第一が混合民族論との相性のよさである。つまり、日本海を介し大陸と対峙する地理的位置ゆえに、人種・民族の相互影響関係を説明しやすかったことがある。第二が、日清・日露戦争を経て、日本海を国境とする意識が拡大していったことを想像できる。太平洋側からみたとき境界に位置する日本海岸、そこは都市住民が山村を美人村としてまなぎすのに似て、ロマンあふれる場所と目に映ったのであろう。

第三に新潟美人の影響がある。新潟美人の著名さはたとえば、全国各地の名妓を紹介した明治四一年の『日本名妓花くらべ第一集』で、掲載人数一〇〇人のうち、東京以外では新潟七名、京都五名、長崎四名、名古屋二名、大阪・広島各一名を数え、新潟がほかを凌駕していることからうかがえ<sup>(3)</sup>、新潟美人の名声にひきよせられ日本海沿岸全域が美人の産地とイメージされた可能性を指摘できよう。

### （三）「美人となれ」の氾濫

明治三〇年代以降、言説上で芸妓以外の一般女性が美人の批評対象にあがるようになった理由は混合民族論の影響が大きい<sup>(4)</sup>が、ほかに一般女性も、社会に進出したり、都市への外出機会が増大したりし、他者の視線を日常的に意識するようになったことがあろう。

美装をめぐる意識の拡大は、新聞広告の増加で看取できる。とくに目立つ広告は化粧品関連である。明治中期以降、美顔水の新商品の広告が次々と掲載される。

その惹句をみると、明治二八年の「艶顔水」が「顔の色白美にする妙劑」（四月五日「北國」）、同年の「美人泉」が、「美人となれ 美人は最も人に愛せられる」「色を白くし艶を出す」（四月一六日「北國」）、明治二九年の「つやの水」が「肌をやわらかにしつやをよくし」（一月二三日「北國」）、明治三〇年の「キレー水」は「眞の白色美人となるには此薬に限る」（四月二日「北國」）、翌三一年の「肉體美白丸」は服用によって「白色艶美」（一月二〇日「北國」）などと、白い肌となることを煽るもので占められる。

当時の特質として、広告で肌の白さを煽る対象は女性にかぎらなかつたことをあげられる。たとえば、明治二八年の「艶顔水」は「男女顔の色を白くつやをだし」（四月五日「北國」）、明治三〇年の「キレー水」は「男女を問はず眞の白色美人となるには此の薬に限る」（四月二日「北國」）などである。

このような男女共有の商品が流通した背景については林葉子の鋭い

指摘がある<sup>23)</sup>。つまり当時の顔の白色とは単に肌の美しさをしめすだけでなく、性病を意味する黒色の反対の意味をもった。いいかえれば白色への憧憬の背景には、性病の蔓延があつたといえるわけである。

化粧品品の広告で美顔水のほかに目立つのが石鹼である。明治二八年には「色を白くつやをだしきめをこまやかに」にする「新發明御あらひ粉 雪肌」が販売される(四月五日「北國」)。当時は美顔水と同じく美容効果を求めて利用されたとわかる。

このため、化粧品の商品名や惹句には美人が積極的に活用された。明治三四年に青草町の越次郎平が発売した石鹼の商品名は「金城美人石鹼」だつた(一月三日「北國」)。また明治四〇年には帝國化粧品俱樂部「クラブ洗粉」は、「素顔の東京美人」が(三月二十九日「北國」)、あるいは「各新聞が選定せる百美人」が(一月一日「北陸」)、愛用していると宣伝している。

明治末期になると、石鹼広告は挿絵にかわり芸妓写真を多用するようになる。明治四四年のクラブ石鹼広告では一五人の芸妓の顔写真が並べられ、また大正三年のツバメ洗粉では「こんなに美しく、こんなに色白に」のイメージとして新橋芸妓の照葉を紹介している(一月一日「北國」)。

ちなみに明治半ばになると美人をめざし整形手術も行われるようになる。明治二九年の記事に、病院の場所は不明だが、「醜婦を美人に変ずる外科手術」という見出しで一八歳の少女の手術例を紹介してい

る。

内容は手頬骨や顎骨を削りとつた手術経過を記したもので、その結果について、「今まで高く突出で居たる頬は見事に圓みを帯び云なき望み通りのものとならん。只其欠点といふべきは頬に刀痕を存すると今迄高き處が低くなりたるため肉と皮に餘裕を生じ口の邊にさやかなる皺を生きせしとの二点なるべし」と記す(明治二九年四月二六日「北國」)。つまり、執刀の影響が顔面に残る稚拙な手術だったわけである。

実際に石川県で美容整形が実施されたとわかるのは明治四一年が最初である。市内河原町に開院した金沢整鼻院に注射手術をして鼻が高くなった女性の写真が公開されている(明治四一年二月二十八日「北國」)。

このほか明治後半には美容注射も行われるようになったのだろうか。明治四二年には美人菌の注射で美人となれるという処方が新聞で紹介されている。美人菌は細菌学者が実験により発見したもので、この菌を肩先に皮下注射すると、菌が血液に混入して活動を始め、蒼白な頬は桜色に染まり、皺は消えさり、「花恥かしき美人」となれるという(明治四二年八月二五日「北國」)。

#### (四) 北陸美人と美人ツーリズム

ふたたび言説の変化に視点をもどす。明治四〇年以降になると、日本海沿岸を舞台とする美人系批評が登場したことを紹介したが、明治

末以降になると、大陸との交流を視野にいれた外向きの視点にかわり、列島内の各都市や各地方との比較を目的とした内向きの言説が主流となっていく<sup>24</sup>。鉄道網の拡大により都市間の往来が活発化したことが背景にあらう。

このような地域間の比較のなかでは、当初は金沢や富山などの都市名があがることはなく、北国・北陸という地方レベルの設定が一般的だった。ただし、美人批評における北国・北陸は当初、北陸三県をさしたわけではない。明治一九年の中越新聞の娼妓関連記事に「北陸第一等の八百八嬪の名ある越後国」とみえ（三月二十八日「中越」）、明治三六年刊行の羽仁もと子『家庭小話』（内外出版協会）に新潟の女性について「噂に高き北國美人」と説明がみえることから明らかのように、北国美人といえは新潟美人を代表とする意識が強かった。

明治四四年に北國新聞に掲載された「時代美人」なる記事も、「北國美人」の代表地域として新潟県をあげ、一方、「太平洋沿岸は景色が優美であるから美人の顔も何となく悠暢として居る」とする。また、京美人については「北國美人に較ぶると強く締つたところがなく、又體格も發達して居らず、皮膚の色なども綺麗でない」、名古屋美人は「京都よりも幾分か長く、多少神經的なところもあつて眼なども灼としたのは多い」などと批評している（明治四四年二月六日「北陸」）。

そして「北國美人」が生まれる理由について、厳しい自然環境のなかで育つので、「容貌の上にも自然に其感化が現れなければならぬ。

何となく神經的な相があつて眼などは釣り上り、締つた強い顔になつて氣象も雄々しくなつて來る」と説く。自然環境と美人の関係に着目した視点が初めて登場するわけだが、現代のように美肌との関係性への着目はまったくみられない。

このように北陸美人といえは新潟美人の異称という側面をもちつつも、明治四〇年代になると、新潟ではなく「北陸」三県を美人の産地とする言説も登場してくる。その初見は明治四〇年。アメリカ・シカゴのツリビューン新聞社は世界各地から一般女性の美人写真を集め、世界一を決めるコンテストを計画した。日本では東京の時事新報社が窓口となり、各県の新聞社に協力を要請した。

石川県では北陸新聞社が九月に、北國新聞社が一月に募集広告を出しているが、その広告に「北陸三県は由来美人系に属し東邦美人國の稱あり」とみえる（明治四〇年九月七日「北陸」、同年一月一七日「北國」）。

ちなみに全国からの応募を踏まえ、新報社は小倉市・仙台市・宇都宮市ほか出身の上位一二人の名前を発表した。北國新聞社はこの結果に対し、「由来美人系を誇れる本縣選出五美人の遂に落選を見たるは讀者と共に遺憾とする所なり」と悔しがった（明治四一年三月七日「北國」）。

このコンクールについては井上章一・佐伯順子が指摘するとおり素人を対象とした初の美人コンテストとされる<sup>25</sup>。しかし、井上が指摘するように実際に素人が容姿を人前にさらすことは社会的にまだ

非難された時代であり、あくまで日本の社会通念とは関係なくアメリカの要望を無理に引き受けて実施した感がある。実際、石川県で、実質、素人を対象とする類似事業が実施されるのは戦後を待たなければならなかった。

このコンクールの場合、あくまで全国からの募集をすすめるにあたり便宜的に北陸を美人の産地としてくくった観があったが、明治末になると、北陸三県の芸妓を対象とする細かな美人批評記事が登場する。その最初は明治四三年の「北陸の美人」で、五回にわたり金沢・富山・高岡・福井・武生・小松・七尾の芸妓を以下のごとく紹介した。

「山田屋の小金は金澤の名花、水月の鹿の子は富山の美人、堀江のお浦は福井の尤物と稱せられて居るが、金澤にも富山にも福井にも此の地に相應の美人が居る。若し格式と番附でいふならば小繁と金八は富山の元老、越又虎、月見時は金澤の横綱、吾妻樓小雪と酒井のお勇は福井の首領だ」と云う具合に、北陸各地の芸妓を具体的に紹介・批評する。

また、この記事では一記者の批評だけにとどまらず、当時、他県から訪れた別の記者の以下のような批評も紹介している。「去年東宮殿下が行啓あらせられた時、東京大坂の新聞記者が澤山入り込んで、此處に端なく三縣の美人論が起つた。金澤がよい富山が上だと甲論乙駁の盛観を呈したが、歸する所は富山には金澤よりも美人が多いという事に一決した(中略)」。

富山が金沢より美人が多いと盛り上がったわけだが、その理由について記事はこう続ける。「金澤では北間屋でも鏝屋でも宴會に出る女は何時も千篇一律で、所謂姐さん株といふものばかりであった。何處の國でも姐さん株には美人が尠くて、塩茄子の様な女が多い。金澤人の目から見ればお虎や時や鈴や小富は名妓であるが、旅の客から見れば勿論美人ではない。之に反して富山では番附に重きを置かずして二流でも三流でも構はぬ美人ばかりを選抜した、故にズラリと現はれた所は、富山の方は頗る陽氣で見榮があつた」(明治四三年一月二一日「北陸」)。つまり、芸妓を座敷に出す場合、金沢は芸を、富山は容姿を重んじたためというわけである。

大正に入ると、連載はさらに長期化する。大正二年、「北陸新聞」は北陸各県の旅行途中に見かけた女性の印象をつづつた「北陸の女」を四〇回にわたり連載する(大正二年一〇月七日〜二月二一日)。内容は金沢の女性に関して、「美人」となるために、教育、表情、服装などに工夫をしなければならぬと説く程度の軽薄なものだが、以下のとおり、雪が美人を生み出すという自然環境・風土との関係を指摘する言説が登場することは注目できる。

「金澤女の美は、亀田鵬齊のいつた半歳一日の晴なしといった、定めなき北國日和と、山水美と、雪の降る寒い國であるために涵養された美である、所謂北國特有の北國美である」(大正二年一月一七日「北陸」)。つまり雪国と美人／美肌を結び付ける現代の言説は大正期を発端とすると判断できる。

以上で紹介した連載「北陸の美人」「北陸の女」で共通する話題として興味深いのは武生美人である。「北陸の美人」には「越前の武生は昔より美人の産地として知られて居る。曾ては福井よりも名花が多く、福井の紳士連は態々武生へ足を運んだ時代もある」（明治四三年一月二五日「北陸」）、「北陸の女」には「時々知人から「越前の武生には美人が多い」といふ評話を聞くことがある」とみえる（大正二年一月二四日「北陸」）。県庁所在地ではない小都市の芸妓を話題にし美人通であることを自慢する風潮が当時生まれていたのである。

この後も旅行記という体裁はとらないものの、県外から訪れた有力者らの廓遊び体験をネタにした記事がしばしば掲載された。たとえば、のちに内閣総理大臣を務めた加藤高明が大正四年の金沢訪問後、帰りの汽車のなかで、望月や北間屋で芸妓から接待を受けた際の感想として「總じて衣裳の着料なしと帯の結び様が如何にもダラしく謂はば縮りが無い、粋な風采を欠いて居る、矢張り藝者は花のお江戸に限る」と評し、さら生まれ故郷の名古屋はどうかという問いに「金澤より一段劣等だ」とけなし、「北陸は美人國ぞと昔から呼ばれて居れば北陸代表的の美人は新潟に限られて居る」と補足した（大正四年七月一七日「北陸」）。

大正五年には「驚いた日本一の美人金澤に」という見出しで、「新潟芸妓は繚緻も能いが第一衣裳に金の掛つて居るのは金澤芸妓の比ではない」と、新潟市で開かれた北信市長会議の宴に金沢市の課長が参加したときの感想がみえる（七月一二日「北陸」）。

このときの逸話も興味深い。新潟芸妓らは金沢市から課長が来るとわかると、集まってきて「金澤には日本一の藝妓が居るそうだが何んな美人ですか」と尋ねたという。課長は誰かと聞き返すと、「大松の辰子さんと云つて遊藝の腕前は達者で却却の美人で何處に缺點がないと前の坂知事さんが日本一の藝者だと常に吹聴されて居た」と答えたという（大正五年七月一二日「北陸」）。

大正八年の「北陸美人観」では、野田通相に同行した秘書官が北陸の美人について「新潟は赤坂に比すべく金澤は鳥森に比すべく富山に至つては道玄坂だ」（大正八年四月二七日「北國」）と、東京の芸妓をたとえに批評している。

このように明治末から大正期にかけての美人批評の特質は、旧来の学術的な言説と異なり、各地の芸妓との遊興を觀光経験として物語化して紹介する、軽妙な旅行記的な言説が、言い換えれば美人ツーリズムを基盤とした言説が主流化した点にみいだせる<sup>26</sup>。

なお、美人ツーリズム言説は全国的に人気を集め書籍としても販売されるようになった。初期のものとして兵庫県寄留中に神戸・西宮・明石の芸妓を調べたという明治四二年刊吉田隆一編『花柳界美人の評判記』（西村活版印刷所）を例示できよう<sup>27</sup>。内容はかつての廓案内の性格を強く残す点、旅行記型言説の初期形態といえる。

本格的な廓旅行記としては大正五年刊柳原煙花『諸国廓巡礼』（日本書院）がある。全国の代表的な廓を、「気まぐれ者」の二人が飛び歩いて遊興する様子を面白おかしく紹介したもので、はしがきには

「遊廓に中心とした書は、澤山あるけれど、恐らく此の書ほど兩君の觀察に依つて正鴻を得たものはあるまい」とその画期性を誇る言葉がみえる。さらに旅行ライターだった松川二郎も、大正一三年「美人國巡礼」『珍珠を求めて舌が旅をする』（日本評論社）・昭和四年『全国花街めぐり』（誠文堂）・昭和七年『三都花街めぐり』（誠文堂）を著した。

美人ツーリズムが普及するなか、混合民族論にもとづく美人批評も新たな変化をみせる。大正一〇年には北朝鮮各地の字事視察を遂げて帰ってきた矢部市視学は、「北陸美人」が生まれた背景について力説した記事がみえる（九月二日「北國」）。北朝鮮の會寧付近は美人系の根源地とする。その理由はかつて女真族が占拠していたためである。北陸美人が多いのは、その女真族と日本が古くから能登の福浦を窓口盛んに貿易をしていた関係で、女真族の血が北陸一帯にひろがるためという。国内各地の美人比較のなかで浮上した北陸美人という枠組みに混合民族論が馴染むように能登の福浦という具体的な湊町をあげて関心をひこうとしたのである。

一方、美人ツーリズムに適合するように流通したのが、視野を列島内にとどめた混合民族論である。昭和一二年に喜多貞吉が新潟県の民俗研究誌『高志路』二五・六号に発表した「越後美人」は、越後や東北の美人とアイヌ民族との関係性を実証しようとしたものである。このような視線は旅行記型の言説にも表出するようになる。

たとえば、松川二郎は「美人國巡禮」で、京・名古屋・越後・伊

勢・長崎などを美人所としてとりあげ、美人が生まれる要因を長崎県を例に出し「混血」と指摘し、また「日本の美人系は裏日本の出雲に起つて、越前・越中・越後を経て庄内に入り、秋田となり、津軽平野に終つてゐる。確かに、斯く日本海沿岸を走る一脈がある」と、出雲を基点とする日本海美人論を説いた。

さらに松川は昭和一〇年「全国女氣質」で、全国の女性の比較をすすめ、美人どころとして「今の北陸道一帯、即ち越路は随分美人國の老舗であると云はねばならない。否寧ろ、高志（越）の国こそは日本で一番最初の美人國の折り紙が付けられたものと云つてよい」とし、その歴史的背景にアイヌ先住民や出雲との交流などを説いた。

大陸との関係性はもはや思慮されなくなり、長崎貿易を介した西洋との交流やアイヌ民族・出雲民族といった内なる異民族との関係性に美の要因をもとめるようになったわけである。

大正期、北陸地方を舞台とする美人旅行記が人気をみせるなか、記事に散見されるようになるのが「金澤美人」という言葉である。大正五年七月には「金澤美人遠征」という見出しで、岐阜・愛知選出の代議士が金澤遊覧を思い立ち横山代議士のもとを訪れ、芸者遊びを楽しんだ様子が報じられている（大正五年七月四日「北陸」）。

さらに昭和三年の「蠟細工美人その他」と題するコラムでは「北陸の美人系として知られてゐる金澤にお育ちになつて貴方がたは天下から「金澤美人」と呼ばれてゐらっしゃいます。（中略）「金澤美人」惜むらくは表情をご存じないと、いわれても貴方がたは一言もあるまい

と存じます(中略)とにかく無表情な事は同じ北陸系の「新潟美人」よりも遥かに劣つてゐると思はれます。氣候や家屋の構造やその外色々の關係から兎かく陰鬱になり勝なこの北陸地方で女の生きた表情はどんなに美しく見えるでせう」と「金沢美人」は豊かな表情をもつべきと批評する(昭和三年四月七日「北國」)。

さきほど大正に入り「金澤美人」を商品名とする絵葉書や写真集がでまわるようになったと指摘したが、その背景には以上の言説状況から「北國・北陸」を舞台とする美人ツーリズムの市場拡大があったと確認できる。

昭和にはいると、金沢美人のイメージは県外にも知れ渡るようになっていく。管見のかぎり、そのイメージの全国流通をしめす最初の資料は全国の花街を紹介したガイドブックの昭和四年刊松川二郎著『全国花街めぐり』である。

同書は前後篇の二冊からなる予定で、金沢市は後編で紹介する予定であった。結局前編のみの刊行にとどまったが、最後にみえる後編予告において「前篇には三都を始めとして美人系の名古屋、新潟、秋田、長崎、博多などの大物は殆んど網羅されて居るかの観があるけれども、尚ほ東北方面では南部美人系の本場たる盛岡、北陸方面では加賀美人系の中樞たる金澤の兩大關が残されてあり」と、金沢と盛岡を大関と位置付けている<sup>28)</sup>。

このようなご当地美人消費の高まりは昭和初めの人気をみたカプフェーにも影響を及ぼす。昭和九年、香林坊地下のカプフェー「金澤。パ

レス」は「美人系で有名な生粋新潟美人 十數名のサーブス！」を看板にかかっている(昭和九年九月六日「北國」)。現地に行かずともご当地美人と出会えることを売りにしたのである。

大衆が出会いをもとめるご当地美人。その欲望がたかまるなか、金沢美人はあらたな消費段階にはいつていく。次章では観光都市金沢の顔として官民あげて売りだしがすすめられていく経過をみていく。

#### 四 美人のモダニズム

##### (一) 容貌から姿態へ

明治後期から大正期にかけて美人をめぐる凶像・言説を紹介してきた。美人イメージは、混合民族論の影響で素人に拡張した時期があったが、基本は芸妓を前提としつづけてきたといえる。

しかし、このような前提は昭和に入ると崩れていく。それを物語るのが昭和四年の北國新聞社主催の美人投票である。選出者に初めて芸妓以外の職業女性、具体的には金沢近郊にあった粟ヶ崎遊園地の付属劇場大衆座の女優が選ばれたのである。当時の人々には相当の衝撃だったのだろう。記事はこう伝える。

「今日まで、美人投票の一等當選者はことごとく藝妓に限られて居たものである。それが今度はそのレコードを破つて女優が一等に當選して居る。これは確かに非常な變化である。(中略)當選者中にあつて金澤市から當選した者には一人も藝妓がまじつて居ない」(昭和四

年九月二十六日「北國」。

このような脱「芸妓」化という動きは金澤にとどまらず全国的なものであったことは、全国三百の新聞社からの一名ずつの推薦で構成された昭和五年の美人写真集『日本代表美人』（日本電報通信社）で見とれる。特選一〇人の属性をみると、芸妓六人に対し学生・某妹など一般女性が四名をしめ、また石川県の選出者四名の肩書は、芸妓二名、大衆座女優、令嬢各一名だった（写真6）。

また美人にかかわる事業の形態も変化していく。美人イメージの消費方法といえば写真が基本だったが、大正五年から地元新聞社主催で金石海水浴場を開場にさまざまな余興が行なわれるなか、大正一三年から芸妓が魚商や女学生に扮装した芸妓をみつけだす「人捜し」なる余興が行なわれるようになる。芸妓は一般人とは一線を画す美人だという前提にたつて企画された事業だが、もはやその容姿美の鑑賞を主目的としなくなるのである。

昭和に入ると芸妓のイベント出演さえなくなり、かわりに昭和七年から「海のクイン選定」「女王撮影競技」と題し、目の前で美人を選ぶコンテストが開催されるようになる。趣旨は「あでやかな海水着に日傘かきつけて海濱を漫步する女給群から番號により投票して一名の「海のクイン」を選定。クインには優勝旗の外賞品を贈り選定者には抽籤で賞品を贈る」とある（昭和七年七月二四日「北國」）。

応募したのは「金澤カフェーの女給からえりすぐった姿態美と肉体美、容貌美等をおかね備へた麗人三十人」。海水着・ケープ・水泳帽で



写真6 『日本代表美人』 昭和5年 日本電報通信社  
右頁中央には入選20人の1人である東廓の吉力清子を掲載。

身をつつみ、日傘をさして砂浜を歩いた。このときは自由に写真撮影もでき、新聞社に写真を応募しコンクールも行われた（昭和七年八月三日「北國」）。結果、初代のクイーンには赤玉信子が選ばれた（昭和七年八月五日）。ちなみに翌年も同じ女性が選ばれたが、所属は「銀座会館」となっており、カフェー間で盛んに引き抜きがあったとわかる（昭和八年七月三十一日「北國」）。

美人観の変化は行列にも訪れる。後編で詳しく紹介するとおり、かつて都市祝祭の練り物行列では美装を凝らした芸妓が注目されたが、昭和七年の九師団管下凱旋祝賀行列ではカフェーの女給三〇〇人が参加している（六月八日「北國」）。

ただし、女給が芸妓にかわり美人の前提となったわけではないことに注意が必要である。昭和一年の金沢市商工祭撮影競技会では新町のダンスホールのモデルダンサーが被写体となっている（昭和一年四月一二日「北國」）。昭和初期、美人とはより「姿態美」「肉体美」を感受できる女性を前提とするようになったといえるべきだろう<sup>(29)</sup>。

姿態美に重点が置かれるようになった背景について、佐久間りかは、写真により「全身像という新しいフレーム」が与えられ、「一つのオブジェとして人体のフォルムやプロポーション」に意識を向けるようになったことを指摘する<sup>(30)</sup>。つまり写真は容貌からさらにプロポーションをまなざす感性を定着させていったというわけである。

また身体をめぐる新たな社会理念が生まれた影響もある。大正以降、「健康」や「運動」が注目を集め、さらに健康的な生活を営む空

間として「郊外」が発見される。生き生きとした身体性が重視されるようになるのである。

さらに戦争の影響もある。林葉子は日露戦争当時、美人絵葉書が人氣をもった背景として戦場における無聊をなぐさめるものとして、また死をもつて恩に報いるに値する相手として、やさしい女性イメージがもとめられた事情があったと指摘したが<sup>(31)</sup>、日中戦争以降、もはや慰撫する存在どころではなく、兵士にかわって家や国土を守る強い存在にならざるをえなくなった事情もあったのだろう<sup>(32)</sup>。

## （二）麗人・鄙の美人・加賀美人

美人イメージの変質のなか、その対象は女給や女優、ダンサーにとどまらず、一般女性にまでひろがりをもせる。芸妓以外の女性を美人と称する場合、おもに「麗人」と称した。美人という言葉を避けたのは、美人といえは芸妓というイメージが色濃く残っていたからだろう。

たとえば、昭和八年には、北國新聞社が各町のお嬢様をめぐる「町の麗人交驛リレー」を企画する。内容は「四名の社会部記者が自動車を飛ばして未知の麗人から麗人へのメッセーヂをバトン代りとして本社の贈物を携へて町から町に訪問して選ばれた令嬢の平素と時局に對する感想等を寫眞と共に紙上に連載し更にその土地の婦女會、女子青年團、愛國婦人會等およそ婦人團體の活動振りを具さに紹介する」もので、「選定されるミスは其土地の婦女會または女子青年團或は町

役場の推薦にかかり、選定対象となった町は県内二三か町であった（昭和八年六月九日「北國」）。

手渡しされたメッセージは山口孝子県知事婦人によるもので、内容は非常時局における女性として一致団結して難局にあたる必要を説き、最後は「若き女性は花である。それが美と健康と純潔と叡智に輝かしく咲き誇る時、太陽は光と熱とを與へるだらう」としめくくったものだった（昭和八年六月一日「北國」）。

同年、リレーに参加した麗人を一人ひとり紹介する記事「あえかな町の麗人」が連載される。トップを飾ったのは鶴来町の老舗金物商の金田静子二二歳。経歴には二年前に金沢第一高女を卒業し、その後裁縫教務所に通い、昨年から家事の手伝い傍ら生け花の修練をしているとある（昭和八年六月一日「北國」）。また昭和十一年五月二六日から「麗人青春報告書」が一五回連載される。第一回目の紹介者は第二高等女学校を卒業した令嬢だった（昭和十一年五月二六日～六月二五日「北國」）。

昭和十一年には三年前の麗人リレーの発展版といえる「加賀能登賽ころ点取り競争」を北國新聞社が企画する。内容は「加賀、能登の爽涼線に麗人をもとめて東西おのく十五ヶ町村で大賽ころを振りながら得点しつつ明日の吉兆をもたらす平和の象徴、傳書鳩に通信を託すものであった（昭和十一年七月二六日「北國」）。各町の麗人は「町村長・婦女會・女性青年團・學校長」など有力者が推薦し、「人格・學歴・資性・品行・容貌孰れ」の点でもすぐれた女性が選ばれた（昭

和十一年八月二日「北國」）。

実際に記者が麗人を訪ねる様子を見ると、山代町の場合、午後零時五〇分に到着。目的の麗人宅の前には愛国婦人会の幹事や女性青年団役員、北國新聞販売店主、小学校児童が社旗を振って出迎えた。家の当主は紋付で出むかえ一室へ通し、そこで麗人とされる娘へメッセージをわたし、時局に対する感想・覚悟を聞いたあと、サイコロを二つ振るといふ具合だった（昭和十一年八月四日「北國」）。

このような一般女性を対象とする美人イメージは令嬢にとどまらず海村や山村の女性にも波及していく。たとえば、海女の身体をめぐる言説の変化をみると、明治四一年のレポート「奇習奇俗 能登の蟹」は、船倉島の海女について「皮膚は皆赤胴色で斬つても斬れそうにもない」と（十一月二日「北國」）、好奇の目で報告していたが、昭和になると激変する。

昭和六年には羽咋の滝町の海女の働く姿を「水底に人魚は踊る」と表現し、また昭和七年「船倉島遊記」なる旅行記は海女の姿態について「かくしやくと陽に輝く肌の黒い艶、子供の頃から水泳による均整美は全く裸女彫刻の群像である」と紹介する（昭和七年八月六日「北國」）。

昭和十四年の視察記「成田知事一行の船倉島巡り」では「たくましいのは娘達の胸の幅であり、厚さである。島に育つて島に働くものに病人はゐないといふのも事実と思はれる」とその強靱な肉体を称えたり、「陸では眞ツ黒に陽焼けした海士の身体が、一度水に潜れば、眞

ツ青に白く光つて、それが魚のやうにすいすいと泳ぐ様は、まこと人魚である」と海中の海女を光り輝く姿としてとらえるようになる（八月七日「北國」）。

このような海中の労働美や身体美を称える表現／視線は昭和二十七年七月二日付「北國新聞」掲載の「へぐら島ルポルタージュ」での深田久弥の「海女の美は水中にある」という発言へ、さらに近年の輪島海女にかかわる有識者の発言などへと継承され続けている。

明治後期に芸妓の代役のように紹介された白山麓の女性も昭和五年の新聞では「霊峰白山の萬年雪に洗ひ清めた桑島美人」「京美人に劣らぬ奥床しさと聡明さ」などの見出しで独自の美をもつと伝えられ、美の要因は糸紬ぎと都会地への出稼ぎで野良仕事につくものが少ないためという区長のコメントを紹介している<sup>33)</sup>。

かかる昭和初期における美人観の拡散を受けて生まれる呼称こそが「加賀美人」でなからうか。管見のかぎり、加賀美人を確認できる最初の資料は、既述した松川二郎の『全国花街めぐり』で、実質金沢芸妓をさす言葉として使われている。

ただし、加賀美人は金沢美人の異称として使われるようになったわけではなからう。加賀美人の系譜を探る上で看過できないのが加賀女という言葉である。たとえば、明治三年の田植を報道する記事に「早乙女や加賀はをみなの色白く」という俳句が添えられている（明治三年五月一七日「北國」）。

昭和初期の記事にもこれに似たことがみえる。既述の昭和五年の

桑島美人の紹介記事には「雪国の女の頬は軟かくておつとりした魅惑に富むといふ。加賀乙女の美貌は既に有名である」とある。つまり、明治期以降には鄙の美人をさす言葉として「加賀女」が定着していたと想像できる。つまり、加賀美人は、芸妓を前提とする金沢美人というイメージと、自然のなかで働く女性を前提とする加賀女というイメージが溶け合うなかで、定着した言葉だと推定できる。

定着の契機のひとつとなつたのは小唄でなかったか。昭和六年に金沢市水道局が水道の宣伝のために水道小唄を募集した。当選した唄の歌詞をみると「光り玉なす加賀美人」とみえる（昭和六年八月七日「北國」）。そこで歌われた加賀美人とはだれか。芸妓でも素人女性でもない、まさしく「ご当地美人」としかいいようのない茫洋とした存在イメージではなからうか。

### （三）キャンペンガールとしての金沢芸妓

では、昭和以降、美人コンテストから芸妓が漏れるなか、芸妓を前提とした金沢美人なるイメージはどのような展開をみたのだろうか。

大正末以降の芸妓の状況として注目できるのは写真集の出版ラッシュである。大正一五年、紅筆社から『金澤美人選集』（石川県立図書館蔵）が発刊される。はしがきには「由来北國には美人が多い傳へられて居る、雪の國、雪の膚、誠に其所に一脈の連絡が有るらしい金澤は北陸一の大都會であり所謂百萬石の名邑である、豈此所に美人無くては叶はざらまし、實に然り美人雲の如く集まつて居るには毛頭相

達は御座らんが、未だこれを世間に紹介す可き何物も無いのは誠に遺憾であつた」とある。金沢美人が多くいながら紹介した本がないから出版したというわけである。

紹介されたのは東西北三廓及び主計町の芸妓で、紹介数は東三八人、主計二三人、北一七人、西一七人である。主計町の掲載数は西北両廓を超えており、その発展ぶりがうかがえるが、興味深いのは巻頭の写真である。「兼六公園」の風景に溶け込むように複数の芸妓をやや引き気味に撮影した写真が掲載されている。

昭和四年には紅筆社から『金城名花揃』（石川県立図書館蔵）が刊行される。はしがきには美人を「先年此れを世間に紹介なせしも餘り美形を紙上より逸し去りし」ために刊行にいたつたとあり、大正一五年『金沢美人選集』の改訂版とわかる。

その掲載数は前書を大幅に越えて西五一、主計町三五、東二五、北二〇である。西廓にいたつては三倍に増えており、西廓からの強い要請があつて改版にいたつたと想像できる。この写真集でも冒頭には兼六公園の雪見橋・福神山を背景にして芸妓を引き気味に撮影した写真が飾られている。

昭和八年には、名勝を背景に芸妓を撮影する構図をもとにした「新名所絵葉書」が販売される。従来土産物用に金沢駅で「金沢名物絵ハガキ」を売っていたが、景勝ではあまりに月並なので、金沢を印象的にするために東西北三廓及び主計町の代表的な「金澤美妓」や名産品などを紹介したという。発行元は金沢旅行協会。三枚一組一五銭。現

物は未確認だが、新聞にみえる写真から兼六園のことじ灯籠の前や九谷焼の陳列棚の横に芸妓がたつ構図だったとわかる（昭和八年八月六日、八月二〇日「北國」）。

北陸三県の観光連携が意識されるようになった影響から、いままでない趣向の美人写真集も同年に発行される。塚田仁三郎編『北日本民謡全集 附北陸美人集』（北日本社）は、温泉場を含め北陸各地の芸妓などを始めて紹介したもので、金沢からは東一五人、西一〇人、主計町一人、北四人が掲載された。芸妓が中心だが、その服装はかつてのような和服ではなく洋装もみられる。またこれまでの美人写真集と決定的に異なり、金沢銀座会館や尾張町の一九食堂の女給五人も紹介された。

昭和一三年には金沢市役所戸籍兵事課内九里次作編集発行で『尾山の華』（金沢市立玉川図書館蔵）が刊行。東西各三〇人、主計町二四人、北一五人が一頁あたり三人ずつ胸元より上の容姿と名前で紹介される。また年代不明だが、北陸観光出版社発行『かなざわ名妓の葉』（金沢市立玉川図書館蔵）も同時期の発刊であろう。東西北各一〇人の名妓が胸元から上の容姿写真と源氏名・楼名・電話・芸能の情報付きで一ページあたり一名ずつ紹介される。芸能欄には「踊」「清元」「踊つづみ」などが載り、一流芸妓とわかる。

昭和初期に刊行された写真集は基本的に大正期までと同じく各廓を代表する一部人気芸妓を紹介したものが多かったが、昭和十一年、市内四廓の全芸妓四〇〇名を網羅したグラフ誌の刊行が計画される。



写真7 『花かが美』 昭和11年

発行元の金沢市観光協会は「その土地のサービス女達によつて観光誘致の効果が大きいに左右される、好い女のみる観光地は良い風致をもつた観光地と併立して榮える」と説明している（昭和十一年五月一七日）。

結果、同年に金沢観光協会が刊行したのが『花かが美』（石川県立歴史博物館蔵）で東七五人、西九九人、主計七二人、北二九人を一ページあたり六人ずつ掲載した（写真7）。当時の実際の芸妓数について同書は東九〇人、西一三〇余人、主計町八〇人、北五〇人と説明しており、八割近くの芸妓を紹介した、過去の

に例のない規模の写真集とわかる。

当初は芸妓全員を紹介する計画だったのだろう。なかにわざわざ「各廓を通じてこの写真帳に洩れた姐さんが數十名ありますが、それはお願しても写真が頂けなかつた爲」云々と未掲載の理由を記した張り紙がつく。名勝を背景にした芸妓写真はないが、冒頭に兼六園などの名勝地を紹介し、また、「はしがき」には、お国自慢として兼六園や卯辰山の眺めのほかに「金沢美人のあるを忘れては」ならないと記し、兼六園と金沢美人を同等に位置付けていることに留意したい。

以上、昭和初期の美人写真集をあげてみたが、大正期と比較し、芸妓／金沢美人をめぐる二つの視線の変質を読み取れる。ひとつはキャンペンガール化である。大正一五年の『金澤美人選集』や昭和三年の『金城名花揃』は、基本的に大正期に成長をみせる美人ツーリズムの延長上に位置するものであるが、冒頭にかかげられた兼六園を背景にした写真から芸妓を観光都市のキャンペンガールとして位置付けようとする意識が芽生えていたことがわかる。

このような芸妓のキャンペンガール化は、芸妓の出自、いかえれば、キャンペンガールとなり得る正統性をあらためて問う発想をうみだす。たとえば、『花かが美』は「金沢美人の標準」が「俄然として高まつた」画期として「廃藩に伴つて武家の娘が花街に身を沈めるもの多きに及」んだためとする。明治二〇年代の美人零落論と内容は同じだが、昭和初期には歴史的な正統性をものがたる逸話となっているのである。

地域に古くから根差す歴史的存在というイメージの成長とあわせ、芸妓の出身地についても注目が集まるようになる。昭和五年七月に連載されたコラム記事「東西芸妓比較論」では、東京は名古屋種が多く、新潟がこれにつき、大坂は徳島者が非常に多く、富山に至っては地元出身はきわめて少なく金沢・東京・大阪出身が多く雑然としているなど、他地は芸妓の出身が多様であるのに対し、金沢は地元出身で固めていると評価している。また身体的には肌がよく色が白い、心情的には玄人かと思うほど男に惚れてしまうという。この特徴は城下ではごくまれた金沢人の特色であるとす（昭和五年七月一五日「北國」）。

金沢美人をめぐるもうひとつの視線を物語るのが芸妓情報の集覧化（データベース化）である。金沢の芸妓をすべて網羅掲載しようとした『花かが美』はその視線をかたどった典型的な写真集といえるが、プロフィール紹介内容にもその傾向はみられる。

従来、芸妓のプロフィールは美辞麗句をならべた文章スタイルが主流だったが、昭和八年以降になると、情報の羅列となる。たとえば、昭和八年刊行の金沢観光協会の雑誌『観光の金澤』をみてみよう。同雑誌には金沢の人気芸妓を写真入りで紹介する「観光緋帳」というコーナーがある。そのプロフィール紹介は、写真下に名前・身長・体重を掲げ、写真脇に好きなものとして「馬鈴薯、三十四五から四十歳までの男」など、また嫌いなものとして「犬の遠吠え、塾柿臭い息」などを列挙したものだ<sup>34</sup>。

また、昭和九年には、金沢運輸事務所が観光客の案内とするために観光地の各駅長に「北陸代表美人の戸籍調べ」を行わせた。調査項目は、遊廓名・家号・芸名・生年月日・本姓名・出生地・特殊技能・容貌・風采・身長・肉付・特長や旦那の有無などに及んだ（昭和九年六月五日「北國」）。

いずれも姿態にかかわる情報を重視するようになったとわかる。その背景には既述のとおり、昭和以降における美人観の変化の影響をひとまず指摘できるが、廓消費の実情をみると、ことはそう単純でない。芸妓を金沢のキャンペーンガールとして脱「廓」化しつつ、一方でその姿態情報を収集し発信するとはいかなる欲望がひそんでいるのか。下編で、あらためてデータベース化をめぐる背景を検討しよう。

#### （四）ミス時代

太平洋戦争が苛烈になると廓はさびれ、昭和一九年には政府令により享楽の全面禁止となった。とうぜん、美人鑑賞を目的とするイベントも実施されなくなったが、一方、戦地には芸妓写真が慰問用に送られつづけられたのかもしれない。昭和一六年七月には石坂遊廓の芸妓写真二〇〇枚が郷土の兵士に送られたという<sup>35</sup>。

ふたたび美人イベントが実施されるのは昭和二二年である。金沢商工祭の関連事業としてミス金澤の選定が行なわれた。応募者一六三人で、写真審査で二一人を選出し、さらに審査員によって二〇歳前後の五人が最終候補となった。候補者はユリ、バラ、スマレ、サクラ、ボ

タンと命名され、写真家島田逸山による写真を一五商店のショーウィンドウに飾り、市民一般の選挙を行った(昭和二年四月二十九日「北國」)。

昭和二三年には県・金沢市の両観光協会主催で兼六園を背景にして「美女をうつす会」が催された。モデルには西廓芸妓一〇人と劇団「紙風船」の女優七人が選ばれた(昭和三年一月一日「北國毎日」)。

昭和二五年以降になると「ミスラッシュ」と称されるほどさまざまなミスが登場する。昭和二八年の新聞記事は、先日誕生したばかりのミス金沢、ミス百万石をあわせ二〇数人の「ミス美人」がいるとする。

ラッシュのさきがけとなったのは全日本宗教平和博覧会協賛の北國新聞社主催「観光美人」投票である。その得票者約一五〇人を見ると、繁華街の飲食店店員、美容院店員、芸娼妓でしめられる。現在のようによく学生や主婦見習いのような女性はいまだ見当たらないが、美人の前提は芸妓やカフェー・女給からさらに接客業の女性全般へとひろがったとわかる(昭和二五年四月六日「北國」)。このとき一位となったのは石坂遊廓の二五歳の娼妓だった。

昭和二八年の新聞記事によれば、選ばれた娼妓は、その後を一番の売れっ子となったが、半年後の一〇月に仕事をやめ尾山商店街の飲食店の接客婦となり、さらに同年一月に石坂時代の馴染み客だった男性と心中未遂をはかり、その後行方知れずとなったという(昭和二九

年五月二日「北國」)。

昭和二六年頃からは北陸写真連盟がさまざまな女性撮影会を開催するようになる。同年六月には兼六園で着物姿の女性を被写体に「第一回屋外モデル撮影会」を実施(昭和二六年六月一日「北國」)。同年、七月には金石の海浜で「海の女王撮影会」を実施。二〇人の水着姿の女性を北陸写真連盟の三〇人がさまざまなポーズをつけ撮影した(昭和二六年七月一日「北國」)。明治二九年八月には金沢駅屋上で国鉄金沢クラブ写真会八〇人によってミス金沢とミス百万石を招き撮影会が開催された(昭和二九年八月二十七日「北國」)。

明治二八年以降になると趣向を凝らした各種コンクールが実施されるようになる。二八年には片町商店街の洋服店が秋のニューモード紹介とファッションコンクールの宣伝をかねて、エリザベス女王のように美しく、金色の車にのって市内の目抜き通りを練り廻るコロネーションカーニバルを実施。車上にのったのは来沢中の松竹歌劇団の五人と女性店員だった(昭和二八年九月一日「北國」)。

昭和二九年四月には北陸専門店会が「宝塚スターに似た人」を募集(四月二八日「北國」)。昭和二九年七月には北國新聞社新築落成記念のため北陸服装文化協会・北國新聞社主催の裁縫ファッションショー出演の「ミスファッション」コンクールを実施し、応募者一六〇人から二十七人を選出した(昭和二九年七月五日「北國」)。翌月には片町商店街が通りすがりの行人のなかから浴衣美人やスタイルのいい人を選ぶ「ゆかたとスタイルコンクール」を納涼祭りにあわせて実施。声をか

け入賞を告げプレゼントをわたす様子を写真でとり、店に掲示し、要求があれば無料で進呈した（昭和二年八月八日「北國」）。

このような通行人から選ぶ方法は昭和三八年にも金沢市繊維小売団体連合会がミススコットのスカウトを撰ぶために市内デパート前で実施している。通行人の娘さんからこれかと思う人に映画招待をかねて推薦状をわたし、映画鑑賞に来た人のなかから最終選定するという方法がとられた（昭和三八年四月七日「北國」）。

ミスの選出はその後県内各地にも波及する。昭和三〇年には七尾市の港まつりにあわせミス七尾が選ばれた（昭和三〇年七月二五日「北國」）。翌年には鳳至郡町野町商工会がミス観光町野を（昭和三一年四月一六日「北國」）、また門前商店街は櫛比神社の夏祭りにあわせ、門前美人を選んだ（昭和三一年六月二一日「北國」）。昭和初期に芸妓を介し花開いたキャンペーンガールとしての美人イメージが戦後の主流となつていったといえるだろう。

## 五 変質する美人イメージ消費

金沢を舞台とし美人イメージ消費の過程を追った。旧来、美人イメージの近代化についてその消費対象が芸妓から一般女性へひろがったという流れを指摘するにとどまるものがほとんどだったが、美人を主題とした画像や言説を細かく通覧すると、消費方法が時代によって刻々と変化していったことを理解できる。以下、各時代の代表的消費

媒体と消費の特性に注目し五段階に整理し少括としたい。

### 明治二〇年代…写真展覧会の時代…限定的消費化

明治二〇年代、写真展覧会という限定機会でも人気芸妓の写真を消費するようになる。労働に明け暮れた大衆にとつて、美装を凝らした芸妓の姿、それも各廓を代表する人気芸妓の容姿を間近に見る機会はほとんどなかったと想像でき、神仏のご開帳見物に通じるような稀少な視覚体験となつた。

### 明治三〇年代…絵葉書の時代…私的消費化

明治三〇年代に入ると芸妓の容姿をプロマイドや絵葉書を通し手軽に消費できるようになる。つまり、美人イメージを私的に、かつ好きな機会に消費できる段階に入ったわけである。また鉄道が敷設されることで旅行者の消費を企図し、観光案内誌で芸妓を金沢の「美」や「花」にたとえ網羅的に写真紹介するようになったこともこの時代の特徴といえる。ご当地美人イメージの原型はこの時代に登場するといえる。

### 明治四〇年代…新聞連載の時代…日常消費化

明治四〇年代以降になると、新聞が実質廓案内の機能をもつ状況がうまれる。芸妓の顔写真とそのプロフィールの紹介記事が連日、読者の目に触れる状況は、美人消費の日常化段階に入ったといえる。背景には元来、富裕層に限定されていた廓消費が中間層や若年層にまで拡大した事情があつたと想定できる。

また混合民族論を土台とし、東アジアを視野に入れて美人の系譜を

みつめようとする「美人系」批評が登場する。その後、鉄道網の拡大により国内の往来が活発化することで、しだいに美人への関心は大陸を視野に入れた系譜分析から国内各地の比較批評へ移行していく。

#### 大正期…旅行記の時代…観光消費化

大正初期以降、国内各地の芸妓との遊興を固有の観光経験として「物語」化させた旅行記が大量に出回るようになる。いわば美人ツーリズムともいえるべき観光市場が発展をみせるのである。このような欲望の変化を受け、金沢の芸妓は金沢でしか出会えない独自のご当地美人、つまり「金沢美人」としてブランド化され、そしてその写真は土産物として消費されるようになる。

#### 昭和初期…キャンペンガールの時代…消費の多様化

旅行の大衆化がすすむなか、有名観光地や伝統品を金沢芸妓と一体的に紹介することで、地域の魅力を発信する動きが活発化する。つまり、人気の一流芸妓は、脱「廓」化し、観光都市金沢のキャンペンガールのような役割をになうようになった。この点、企業やイベントのキャンペンガールが美人イメージの中心となる戦後の消費形態は昭和初期に形成されたといえるかもしれない。一方、美人イメージは芸妓を前提としなくなり、カフェーの女給や一般女性も含むようになる。背景には国家あげての戦争参画システムの強化により、美人を、兵士を癒す存在から、兵士をささえる存在へと位置付けるようになった影響などがある。

注

(1) この点、美人観はすぐれて民俗学の課題となりえたが、研究は、錦仁『浮遊する小野小町』（二〇〇一・笠間書院）など小野小町をめぐる口承文芸分析が中心であり、美人観それ自体を真正面からとらえようとした成果は柳田國男の女性論のなかの言及にとどまろう。周知のとおり、柳田國男は「女の咲顔」で女の笑窪・愛嬌が重視される背景について、また「妹の力」で平安美人イメージが生まれた背景について分析した。混血民族論が美人言説の主流であった当時において男女の非対称関係を読み解く視点は画期的である。

(2) 『高松町史』（一九七四）九五四頁。

(3) 浅倉有子「国風の美」小玉美意子他編『美女のイメージ』（一九九六・世界思想社）、小林隆幸「新潟美人をめぐるあれこれ」『新潟市歴史博物館研究紀要』一三三頁（二〇一七）。

(4) 『加能史料』室町Ⅳ（二〇〇七・加能史料編纂委員会）四三二頁。

(5) 中野三敏『江戸名物評判記案内』（一九八五・岩波書店）一一、二四頁。

(6) 美人をめぐる美辞の系譜は張競『美女とは何か』（二〇〇一・昌文社）第七章が参考になる。

(7) 佐久間りか「写真と女性」奥田暁子『女と男の時空Ⅴ』（一九九五・藤原書店）二二七頁。また百美人写真の詳しくは岡塚章子「小川一眞撮影『凌雲閣百美人人工着色写真アルバム』についての考察」『東京都江戸東京博物館研究報告』第一五号（二〇〇九）、東京都江戸東京博物館編『浮世絵から写真へ』（二〇一五・青幻舎）を参照。

(8) 吉田好二の住所は石川県営業写真協会編『石川県写真史』（一九八〇・石川県営業写真協会）四四頁に、明治四年に観音町開業、明治二四年御徒町移転とあるが、根拠は不明であり、本稿紹介資料から誤りであると判断できる。

- (9) 右掲(8) 四八頁参照。
- (10) コンクールについては井上章一『美人コンテスト百年史』(一九九二・新潮社)、佐伯順子『明治(美人)論』第一章(二〇一三・NHK出版)を参照。
- (11) 前掲(7)同。
- (12) 『柳田國男全集』二九(二〇〇二・筑摩書房)収録一八八頁参照。初出『経済往来』九卷六号(日本評論社)。
- (13) 林葉子『性を管理する帝国』(二〇一七・大阪大学出版会)四一三頁。
- (14) 知的コミュニティ基盤研究センター図書館情報学図書館共催展示パンフレットの綿拔豊昭「金沢の肖像写真について」(二〇一七・筑波大学図書館情報メディア系知的コミュニティ基盤研究センター)には明治四〇年代初めに絶大な人気を集めた山田屋小金・浅野屋音重・大重辰子など東廓の芸妓写真が多く紹介されており、絵葉書市場の拡大を認められる。
- (15) 竹松幸香『近世金沢の出版』(二〇一六・桂書房)六七頁。
- (16) 宮本由紀子は写真入りの細見の刊行目的について「馴染みの客はもとより、地方の人々にまで購買層を広げ」るためと分析する。宮本由紀子「明治期の吉原―「吉原細見」の分析を通して」『駒澤史学』三四(一九八六)二〇六頁。
- (17) 芸妓の新聞報道の概要については前掲(10) 佐伯順子二四頁を参照。
- (18) 詳細は拙稿「ショーウインドウの中の美人―造り物・生人形・マネキン嬢」笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史』(二〇一四・勉誠出版)を参照されたい。
- (19) 混合民族論史については小熊英二『単一民族神話の起源』(一九九五・新曜者社)、岡本雅亨『民族の創出』(二〇一四・岩波書店)を参照。
- (20) 徳田秋聲『郷里金沢』(二〇〇五・能登隆市)収録。
- (21) 古厩忠夫『裏日本』(一九九七・岩波書店)参照。
- (22) 加野十次郎『日本名妓花く良べ』第一集(一九〇八・便利堂) 国立国会図書館デジタルライブラリー八、九コマ参照。
- (23) 前掲(13) 四章参照。
- (24) たとえば大正四年の鶴崎鷺城『鳥の目だま』(一九二五・興成館書店)に「日本の美人系は第一が京都で、次では名古屋、新潟、秋田、徳島、松江といふ順序だらう」とみえる。また大正四年四月一日「大阪毎日新聞」掲載の「関西の三大都市」では「京都が我国の旧い首都として権門を集め文物制度を集中したる反面には諸国の美人も亦其権榮を慕うて此処に集まり以て今日の京都美人の根源となつた事は既に争い難き事実だが、名古屋侯の採りたる遊樂的繁榮政策もまた名古屋に多くの美人を植付け今日の美人的豊饒を来さしめた種苗である京都と名古屋が東西の二大美人都市として噴々たるものは決して偶然ではない実には慥然した培養を経た結果である神戸は此点に於て遺憾ながらまだ苗代時代美人系を云為する資格がないのである」とあり、京都名古屋は美人の産地とできても神戸は適当しないとみえる。
- (25) 前掲(10) 第一章参照。
- (26) この解釈は橋本和也『観光経験の人類学』(二〇一一・世界思想社)から示唆を受けた。
- (27) 国立国会図書館デジタルライブラリーで閲覧可。
- (28) 松川二郎『全国花街めぐり』(一九二九・誠文社) 七四三頁。
- (29) このような評価ポイントの変質は全国的なものであったことは、昭和四年に東京の蒲田撮影所が所長の欧米行脚にヒントを得て脚線美女女優の募集を日本キネマ史上初めて行なったところ、六〇名の募集があったことからもうかがえよう(昭和四年六月一日「北國」)。
- (30) 佐藤(佐久間)りか「近代的視線と身体の発見」坪井秀人編『偏見とい

- (31) うまなざし』（二〇〇一・青弓社）一六七頁。
- (32) 前掲（13）三〇七〜三〇九頁。
- (33) 『戦争システムと女性イメージの関係については若桑みどり『戦争がつくる女性像』（一九九五・筑摩書房）を参照。
- (34) ちなみに瀬川清子『海女記』『販女』など昭和一七年発刊の女性叢書が物語るように、昭和一〇年代とは地方に生きる女性たちの生活ぶりを女性民俗学者がみつめた時代であるが、その背景にはこのような働く女性を美しいとする視線、さらにいえば戦争システムのなかの女性の立ち位置の変化があったといえる。ちなみに、同叢書の一冊である昭和一八年刊江馬三枝子『飛驒の女』には「飛驒は美人系だと云はれてゐる」から始まる「小町むすめ」という章がある。民俗誌のなかでは数少ない美人に関する聴取事例報告であるが、「美人系」という視点が学術的な報告にまでいまだ影響力をもっていたことを読み取れる。
- (35) 『観光の金澤』二号（一九三四・金澤観光協会）二四頁。
- (36) 昭和一五年から一九年の廓閑連記述は「石川の女性史」編集委員会編『石川の女性史』（一九九三・石川県各種女性団体連絡協議会）二八七〜二八九頁に負う。